



図-7 西日本農研西深津地区(芝生畦畔展示)

生は、地域条件、立地条件、気象条件等によって、大きく左右される。例えば、同一地区内の隣の圃場においても同じ形状の畦畔を見つけることは難しい。したがって、作物の栽培手法のような統一的な畦畔管理手法を示すことは非常に難しいところである。しかし、本技術は、シバが利用できる農村地域全体への普及を目標に、研究開発を進めて参りたい(図-7)。

謝 辞

本成果は、復興庁・農水省が実施する「食料生産地域再生のための先端技術展開事業(中小区画土地利用型)」、農研機構生物系特定産業技術研究支援センターが実施する「攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業(うち産学の英知を結集した革新的な技術体系の確立)(水田作)」、農水省委託プロ「低コスト・省力化、軽労化技術等の開発(畦畔除草ロボット)」および農水省交付金で得られた。ここに関係各位に感謝の意を表す。

参考文献

- 伏見昭秀ら 2013. 農村畦畔の法面における二重ネット工法によるシバ在来品種「朝駆」植栽の検討. 芝草研究 42,130-136.
 伏見昭秀ら 2015. シバ在来品種「朝駆」の

導入が農村畦畔の群落高の推移および発生種に及ぼす影響. 芝草研究 43,163-167.

- 伏見昭秀ら 2016. 農村における畦畔法面での二重ネット工法によるシバ植栽方法. 日本国特許庁特開広報, 第 2016-214201 号.
 伏見昭秀・長沼和夫 2016. 瀬戸内沿岸地域における農村の芝生畦畔では年 3 回の草刈りでシバ (*Zoysia japonica*) の生育に必要な光環境は確保できた. 芝草研究 45,12-15.
 神部廣之・長岡保男 2002. 法面緑化工法. 日本国特許庁特開広報, 第 2002-363990 号.
 宮池誠文 1996. 移植栽培用芝. 日本国特許庁, 実登公報第 3030216 号.

農研機構 2015. 畦畔法面における二重ネット工法を用いたシバ (*Zoysia japonica*) の植栽技術. (http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/laboratory/warc/059322.html) 2018.11.23 取得.

農研機構 2018. 畦畔法面における二重ネット工法を用いたシバの植栽手順(具体的な施工法). (http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/pub2016_or_later/pamphlet/tech-pamph/079635.html) 2018.11.23 取得.

田畑の草種くさくさ 葦・芦・蘆・葭(ヨシ・アシ)

イネ科ヨシ属の大型の多年草。全国の河川、池・沼・湖などの水際に背の高い群落を形成する。地下茎は時には5mを超え、草丈も猛暑の時などには5m以上にもなる。茎は丸くて中空、葉は長さ30cm～50cm、幅2～4cmの広線形。

日本在来で古より水辺に群落を形成していた。その出芽時の突き上げるようなたくましさは古人の耳目を集めていたのだと思われる。古事記上巻の創世編冒頭、天地が混沌とした泥の中から「葦芽のごと萌えあがる物に因りて」産まれた二柱の天神、我々の国土はこの泥のような中から「葦」が一斉に芽吹いていくように萌えあがっていった、だから日本の古名を「豊葦原瑞穂の国」というようになった、とされている。

万葉人にも「葦」はしっかりと目に留まっていた。万葉集には「葦」を詠み込んだ歌が50首ほどあり、さらに小倉百人一首にも3首選ばれている。しかし、古事記やこれらの歌に歌われた「葦」はすべて「あし」で、「葦」が「よし」として出て

(公財)日本植物調節剤研究協会
 兵庫試験地 須藤 健一

くるのは1170年の「嘉応二年住吉社歌合」からのようである。

牧野富太郎は、アシは桿が変化したもので「悪し」に通ずるのを嫌ってヨシと呼んだもので、本来の名はただしくはアシだ、と言ひ、さらには、ヨシが生える水辺を「アシハラ」とは呼ばずに「ヨシハラ」と呼ぶのは面白い、とも言う。その「葭」が生える原に作られた江戸時代の遊郭が「葭原」であり、のちに縁起を担いで「吉原」となった。

葦の中を嚙とする鳥が「葦切」であり、葦の茎を編んで作った簀を「葦簀」という。

一方、パスカルの「パンセ」の中の一文、前田らの訳では「人間はひとくきの葦にすぎない。(中略)だが、それは考える葦である」と、「あし」と読ませる。

「葦」を「アシ」と読むか「ヨシ」と読むかは場面によって異なるようである。

現在、植物の標準名は「ヨシ」である。